「教育県大分」創造に向けた地域別意見交換会 in 豊後高田　開催概要

［開催日：令和６年１１月１９日(火)］

［学校訪問］豊後高田市立真玉小学校
［訪 問 者］大分県教育委員会（山田教育長、教育委員、教育次長　他）
豊後高田市教育委員会（河野教育長、教育委員、課長　他）

【豊後高田市立真玉小学校の概要】

夕日１００選に選ばれた真玉海岸をはじめ、豊かな自然・文化・歴史に恵まれた学校。校区に市の住宅区画造成区域をもち、その造成区域をはじめとして近年児童数が増加。学校の教育目標に「夢や目標に向かって学び・むすび・みがき合う　子どもの育成」を掲げ、「子どもも先生も、元気に登校、笑顔で下校する学校」をめざしている。育成を目指す資質・能力に「自他を認め合うコミュニケーション能力」を掲げ以下の重点目標の下、教育活動を推進している。

①「わかる・できる」を感じる魅力ある授業づくり
②協働的・対話的な活動を通して、学習や生活での問題解決できる力の育成

安心して通わせたいと思える学校になっている様子がうかがえた
（山田　県教育長）

【真玉小学校の特色ある取組】

(1) ICT の活用

１人１台端末の毎日持ち帰りを基本とし、「協働的な学び」の一助として授業支援アプリを、個別最適な学びの一助として ICT 学習教材を利用。本年度からは、1 人 1 台端末を使って児童の不安や困りの把握・早期対応を促す「心の健康観察」も取り入れる等、様々な場面において、組織的に教育 DXを推進している。

(2) 幼保小中の連携

月3回、1年担任による幼稚園への「架け橋保育」や幼稚園と小学校の互見授業を実施し、「架け橋プログラム」に基づいた相互理解・研修を深めている。中学校とも「架け橋授業」や小中合同奉仕活動等を通して、積極的に連携を図っている。

(3) チーム学校としての連携

支援が必要な様々な児童への対応として、授業の UD（ユニバーサルデザイン）化を行うとともに、個別の指導計画推進教員をはじめ、各関係機関との連携や特別支援教育支援員の活用等を「チーム学校」として積極的に推進している。

転入児が増える中で人間関係づくりプログラムの効果は大きい
（近藤　校長）

【学校訪問での意見交換内容】

(1) 組織的な授業改善について

学校全体でまずは児童一人ひとりに自分の考えを持たせることを大切にし、発信への意欲につなげている。UD の視点から児童とも単元計画を共有し、どの子も参加への意欲を高められるよう 1 単位時間の流れも統一している。その中で ICT の活用は効果的であり、特に AI ドリルの活用により様々な層の児童に対応している。

(2) 児童数増加への対応

子どもたちは、移住等で転入してきた児童に対して柔軟に受け入れることができている。これは県が示す「人間関係づくりプログラム」の実施による効果が高いと認識している。授業の様子からは積極的に教え合う姿もみられた。

授業の様子からも、保護者にとって安心して通わせたいと思える学校になっており、市の移住施策等への貢献も大きい。

地域学習と連動した国語の学習に地域の方も参加

［意見交換会テーマ］「芯の通った学校組織」を基盤とした教育水準の向上
～すべての子どもが夢を描き実現できる持続可能な教育について～
［出　席　者］市関係者（１９名）、県関係者（２３名）、計（４２名）

【すべての子どもが夢を描き実現できる持続可能な教育について】

(1) 切れ目ない一貫した教育支援体制

・公立幼稚園が主導して、幼保小連携架け橋プログラム開発会議を立ち上げ、カリキュラムを作成している。
・小中相互の架け橋授業では、小学校教員は中学校へ、中学校教員は小学校で授業を行う、いわゆる乗り入れ授業を実施している。
・中高連携では、互いの授業実践を「見る・知る・対話する」機会をつくり、子どもたちの学びの姿を共有したり、他校種の視点から授業検討会を行ったりしている。

(2) 「個別最適な学び」と「協働的な学び」の充実

「主体的・対話的で深い学びの授業」及び「個別最適な学び」の実現に向け、協調学習の実践研究による「新しい学びプロジェクト」を導入・推進している。全国大会として協調学習の授業公開をはじめ、講演や討論の場も計画している。

(3) 学びの 21 世紀塾

・経済格差が教育格差を生じさせてはならないという発足時の理念のもと、２３年目を迎えた。
・幼小中対象の「いきいき寺子屋」「わくわく体験」「のびのび放課後」の３事業をはじめ、令和４年度からは、「高田高校生のための公設民営塾『うみね』」を開講している。

「地域の活力は人である」という理念のもと施策を推進
（河野 豊後高田市教育長）

コロナ禍をまるごと生き抜いた子どもたちに確かな学びを
（河野 豊後高田市学校教育課長）

【意見交換の内容】

(1) 移住者への対応・支援について

・価値観の相違もあるが学校が家庭とつながって対応したり、地域の公民館、各協議会からの声かけでともに過ごす場をつくったりしている。
・移住希望者の児童との体験・交流活動を行った経緯もある。２泊３日の農泊体験でお互いを知り合う機会を持つことは効果的でその後の移住者増加にもつながった。
・移住希望者も様々な価値観を持っており、あたたかい目で見守ることも必要。外国人の受け入れに対しては BIC（豊後高田 International Contribution 事業協同組合）が対応している。
・移住者増の要因は子育て支援の充実にある。即日対応が強み。これまでの取組の積み重ねで充実してきた受け入れ体制を説明することで、移住を考える保護者も安心してくれている。

教育の充実に魅力を感じていることが移住先としての選択肢になっている
（山田 県教育長）

(2) 切れ目ない一貫した教育支援体制について

・幼児教育の段階から、かかわりあいながらより良いものを求めて創造する経験を積み重ね、小学校以降では、課題発見と解決のために他者とかかわってより深い学びとなる協調学習へとつながっている。
・市の架け橋プログラムにより地区の保育所や保育園との連携が円滑になり、学校をプラットフォームとした交流をすすめることができている。
・公設民営塾「うみね」では高田高校の指導内容とリンクしたプログラムで、進路実現に向けたサポートを行っている。

【山田県教育長より】

移住先として選ばれる理由は、経済的な施策の充実だけでなく、教育の充実の積み重ねに魅力を感じているからだと感じた。市教委をはじめ校長先生方の説明には説得力があり、聞けば聞くほど移住したいと思えるすばらしい町である。今後もこの連携を高田高校へとつなげていただきたい。県も地元にいながら難関大学を目指せる遠隔教育システムの構築を行っていく。